

## 東部地区の失われた産業遺産

【問合せ】  
市民図書館歴史資料室  
(☎ 017-732-5271)

昭和の大合併以前、青森市東部には野内村、東岳村、原別村、浜館村（昭和2年（一九二七）までは造道村。同年造道・八重田地区を青森市に合併して名称変更）の諸村がありました。東部地区は農村・漁村と多彩な姿を持ち、さらに観光地である浅虫温泉もあります。先頃「明治日本の産業革命遺産」がユネスコ世界遺産に登録されたように、近年、日本の近代を支えた産業遺産への関心が高まっています。

今回は東部地区を中心に、現在では失われた産業や産業関連施設について紹介しましょう。

### 浅虫の製塩業 （旧野内村）

温泉熱を利用した産業というと、県内では大鰐温泉の「大鰐もやし」栽培が有名ですが、明治時代の浅虫で温泉熱を利用した製塩事業が行われていたのはご存じでしょうか。

江戸時代から津軽半島や夏泊半島の

沿岸部では製塩が行われていました。

当地は寒冷地であるため、瀬戸内地方のような天日で海水を蒸発させる塩田法は普及せず、海水を直接煮詰める直煮法（じき）が行われていました。直煮法は大量の燃料を消費します。浅虫地域は海のすぐそばまで山林が広がり、燃料となる木材の調達が多かったが、資源の枯渇につながるため、幕末から明治にかけて新たな製塩法が検討されました。例えば、幕末期には野内村で塩田法が試行されましたが、十分な成果を上げるに至りませんでした。

明治9年（一八七六）から同12年にかけて、青森県令（現在の知事）山田秀典の発議により、海水を温泉熱で蒸発させ濃縮液を釜で煮込む製塩試験が浅虫で実施されました。

明治13年には、廃藩で家録を失った士族救済のための事業である士族授産事業として「通新社」という団体により製塩が事業化されています。

同社の県令宛願書によると、温泉口（現在の足湯付近）から、海岸沿いに



【写真①】浅虫にある「篤行者 米田甚吉翁」碑

埋め立てた製塩所（浅虫川河口付近）まで、温泉を送る管（送湯管）を設け、3年目以降から年間7千200俵生産する計画を立てています。しかし、経営に慣れない旧士族だったため、明治15年頃には失敗に終わったといえます。

その後、事業を引き継いだのは、弘前和徳町で木綿屋を営んでいた米田（よねだ）甚吉です【写真①】。

米田は製塩業の将来性を見込んで明治21年から事業を再開。海水をくみ上げるポンプを導入し、製塩釜の増加に応じて温泉を掘り抜くなど、改良を行いました。

その後、浅虫周辺に敷設された日本鉄道東北線の線路が送湯管を分断したため、同社との訴訟問題が起り一時休業しましたが、明治34年には年間2千500俵相当を生産しました。生産した塩は福島・盛岡など県外へ販売されました。

浅虫の製塩業を廃業に追い込んだのは政府による塩の専売制です。

政府は日露戦争の戦費調達を目的に



【写真③】青森競馬場（『目で見る青森市の歴史』より）



【写真②】青森種鶏場（『東奥之魁』より）

明治38年から塩の専売制を導入。浅虫の製塩場も専売局の監督を受けることになり、国へ塩を納付する契約を結びました。しかし、政府は浅虫のような小規模塩田を整理する方針をとり、米田は明治42年8月に会社を解散、翌43年9月に製塩事業を停止しました。

現在の浅虫にはかつての製塩業を偲ばせるものは残っていません。

### 東岳の鉱業（旧東岳村）

現在の青森県では石灰石以外の鉱山は閉山してしまいましたが、青森市域では、東岳周辺に大正期から昭和30年代にかけて、銅や鉄鉱石を採掘する鉱山がいくつか操業していました【図①】。

このなかで、中心を占めていたのが、現みちのく有料道路と県道平内野内線の分岐点付近から2キロメートルほど北側の山中にあった東岳鉱山でした。東岳では、明治30年（一八九七）頃に鉄鉱石が局所的に集中している場所が発見され、何度かの試掘を経て、大正6年（一九一七）6月に操業に至りました。背景には第一次世界大戦の勃発に伴う大戦景気がありました。

三井財閥の系列会社である北海道製鉄株式会社が経営し、当時の『東奥日報』によると、事務所、倉庫、火薬庫、社宅、4棟64戸の鉱夫長屋が建設され、

労働者のために医者や学校建設も予定されていました。労働者は約200名で、中核を占める採鉱工夫等は秋田県院内地方から来ました。

鉱石はそりと荷馬車で輸送し、運行は主に滝沢地区の農民が担いました。採掘開始から30か月で、約3万トンの鉄鉱石を産出したといえます。

しかしそのピークは短く、第一次世界大戦後の恐慌により、大正9年には閉山を余儀なくされます。東岳鉱山が復活したのは昭和11年（一九三六）のことです。背景にはやはり戦争があり、満州事変（昭和6年）後の軍需景気によつて、これまで採算性が合わずに放置されていた休鉱山にもどんどん投資が行われていったのです。

鉱業権は個人に移り、銅鉱と石灰石と併せて開発が進められました。東栄鉱山と改称したのもこの頃です。

東栄鉱山は昭和20年の終戦とともに休山になりましたが、戦後も幾度か事業者や名称を変更して小規模ながら採掘が続けられ、最終的には昭和37年頃からの不況によつて閉山しました（『東奥年鑑 昭和39年版』）。

このほか、東岳周辺には現七戸町の山中にあった上北鉱山から野内駅へ鉱石を運ぶ索道（貨物用リフト）が昭和48年の閉山の頃まで延びていました。

### 県病の場所にあった農林省青森種鶏場（旧造道村）

現在の県立中央病院とその周辺には青森商業高校、自治研修所、環境保健センターなど県の施設が集中しています。

実はこの地には戦前、鶏の繁殖用の卵をとるための試験を行う、国立の種鶏場があったのです。

昭和2年（一九二七）、国は鶏卵増産10か年計画を立て、全国5か所に種鶏場を置きました。そのひとつが青森市と合併したばかりの旧造道村にあり、北海道と東北6県を管轄しました【写真②】。

海外から輸入された種鶏が青森種鶏場に移送され、昭和3年2月から本格的に業務が始まりました。敷地面積は約14ヘクタールで、鶏舎10棟のほか、放飼場や飼料用の畑があるなど、広大な敷地を持っていました。

青森種鶏場は終戦後の昭和25年に廃止され、県が引き継ぎましたが、これも昭和29年に廃止になりました。その跡地を、現在、県有地として利用している訳です。

このほか東部地区には、昭和6年に浜館村に開設された青森競馬場（昭和26年度に廃止【写真③】）、昭和11年に合浦公園東側に設置された県立水産試

験場陸奥湾分場（昭和25年廃止）など、産業関係の施設が存在しました。

多くは戦後の合理化でなくなりましたが、青森県の産業発達を支えていたのです。

（元『新青森市史』通史編執筆協力員 中野渡一耕〈県庁県史編さんグループ〉）



【図①】東岳周辺の主な鉱山と関連施設（『新青森市史』通史編第3巻近代より）